

その他

グラフィック・ファシリテーション講座参加報告

—リカレント教育システム活用事例の紹介—

木村 千夏*

Report on Participation in Graphic Facilitation Seminar
: Recurrent Education System Application Examples

Chika KIMURA

1. はじめに

平成30年度地方大学・地域産業創生交付金の交付対象事業として、徳島大学が参画する徳島県「次世代“光”創出・応用による産業振興・若者雇用創出計画」が採択された。人と地域共創センターもその事業の一翼を担い、「光産業・創造的超高齢社会地域人材育成プログラム」に取り組んでいる。その取り組みの1つに、リカレント教育システムの開発があげられる。リカレント教育に関心を持つ社会人に向けてその情報を発信することを目的に、現在、システム整備を進めている。本稿は、このシステムを活用し受講生募集を行った2例目の講座「グラフィック・ファシリテーション講座」への参加報告である。

2. リカレント教育システムの紹介と講座参加の経緯

リカレント教育システムは、これまで個別に把握されていたリカレント教育情報を統合し、学びたい人に学びたい情報を届けることをめざしている。例えば、学部や部署が個別に開催している公開講座やセミナーの情報を一元管理し、学習者に合った情報をメール通知などで提供することを計画している。現時点(執筆時)では試行段階ではあるが、講座やセミナーの情報発信と申込受付がWeb上で行うことができる。そこで、まず、2019年10月6日(日)から開講の「高校生のための授業・実験講座(T-LECS)」の申込受付において本システムを活用した。この講座には14名の高校生が申し込んだが、申込時、特に不便を訴える生徒はいなかった。デジタルネイティブである彼らにとって、Webでの申し込みは慣れた行為だったのかもしれない。それでは、幅広い年齢層が参加する講座ではどうだろうか。その関心のもと、グラフィック・ファシリテーション講座の主催者

* 徳島大学人と地域共創センター

に依頼し、参加者アンケートの中に、システム使用の感想を尋ねる設問を1問加えてもらった。また、グラフィック・ファシリテーションは、本センターが役割を担う「人と地域の共創」にも有用な手法と考えられる。そこで、筆者も受講生として参加し、講座の内容とともに参加者のアンケート結果を報告する。

3. グラフィック・ファシリテーション講座

3.1. 概要

本講座は、地方大学・地域産業創生事業の一環として学長企画室が主催し、学長企画室ファシリテーターの玉有朋子氏が講師を務め、2019年10月27日（日）10:00～17:00（休憩1時間30分）に行われた。参加者は33名で、講座後回収した30名分のアンケートによると、年代は30代8名、40代6名、50代8名、60代2名、10歳未満、10代、20代が各1名、無回答3名であった。また、申し込みはリカレント教育システム以外でも受け付けたが、全参加者中、本システムから申し込んだ人は22名であった。本講座のリカレント教育システム申込フォームを図1に示す。講座では、7つのテーブルに4～5名がテーブルを囲んで座り、はじめに座学で基礎知識を学んだ後、さまざまなワークに取り組んだ。

また、講座のスケジュールは、「1. グラフィック・ファシリテーションとは（座学）、2. 基礎のワーク、3. アイコン練習、4. ストーリーの可視化、5. ストーリーテリングトリオ（発散・収束）、6. グラフィックレコーディング、7. テンプレートを使いバックキャストで未来を描く」であったが、この講座らしく、スケジュールや約束事は図2のようにグラフィックで可視化されていた。

地方大学・地域産業創生事業プレゼンツ
グラフィック・ファシリテーション講座

グラフィック・ファシリテーションとは：主に情報伝達を目的とした視覚表現を使い、話し合いを円滑に進行させる技術のこと

概要
話し合いを促進し、みんなで未来を創るツール
「グラフィック・ファシリテーション」を学ぼう
「自由に意見が言え、創造的なアイデアが生まれる会場やワークシ

お申込みはこちら

名* 姓*
名 姓

電子メール*
電子メール

電話番号
電話

図1 リカレント教育システム申込フォーム

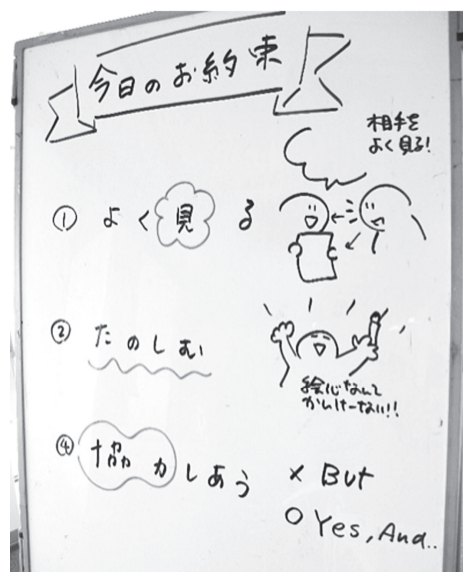


図2 今日のお約束

3.2. グラフィック・ファシリテーションとは

グラフィック・ファシリテーションは、対話の内容などを可視化してファシリテーションの効果をより高める手法で、グラフィックレコーディング（対話の内容を可視化する）、スクライブ（対話をまとめながら書く）、フレームワーク（事前にプログラムに合わせ作成した枠組）など様々な手法があり、用途に合わせて使用するものである（玉有 2019）。様々な立場や背景を持つ人々が集まって対話をするとき、同じ言葉を話していても、その言葉が持つ意味はそれぞれ微妙に異なっていて、なかなか共通認識を持っていないことがある。そういうときに対話の内容を可視化して、同じものを見て情報を共有するというこの手法は大変効果的であると以前から感じていたので、本講座にも興味深く参加した。

本講座では、マッピングして構造化したり、アイコンを使って図解やドローイングしたりすることで、情報を分かりやすく可視化し共有する基本的な方法が紹介された。その他にも、自分の脳内整理やアイデア発散など「自分のため」に描くことや、“話す・聞く・描く・見る・可視化で分かる”という一連の行為を「誰かと一緒」にする等、対話の場面以外での有用性についても触れられた。

3.3. ワークの内容

「今日のお約束」に書かれているように、「絵心がない」というワードは厳禁で、参加者全員が基本から段階を踏んで練習を進められる構成になっていた。まず、図3のように線を描く練習をしたが、描き慣れていない筆者は、マジックのペン先のどの部分をどう使えばどういう線が描けるかを試行錯誤しながら描くという状態からのスタートであった。つぎに、様々なアイコンやふくろ文字に挑戦し、そのあと、図4のように、○を9つ描き、目の位置を矢印の方向に合わせ、漫符と呼ばれる涙や星、電球などを加えて、表情を描き分ける練習を行った。これは、コツさえつかめば効果的なアイコンが書けるという好例で、「絵心がない」がNGワードである理由がよく理解できた。

さらに、2人ペアになってお互いをよく見て似顔絵を描いたり、「徳島のすきなところ」を語り合い、聞き手は話し手の話を漏らさないよう文字で書き留めるというストーリーテリングを行った

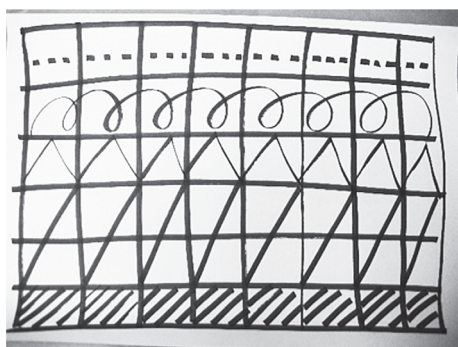


図3 線の練習（筆者作）

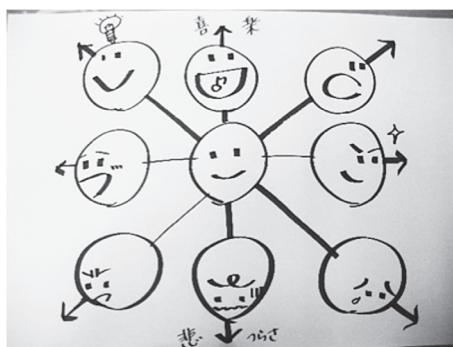


図4 表情の書き分けの練習（筆者作）

りした。これらも、絵心以前に、相手としっかり向き合うことや、話の内容を正確に受け止めて理解することが大切であることを知るワークであったと感じた。

以上のようなワークのあと、講師が徳島大学の大テーマである、“高齢化を、すべての人が幸せになるチャンスに変える社会”にする「創造的超高齢社会」への取り組みについてストーリーテリングし、それを参加者が書き留めて可視化するという実践的なグラフィックレコーディングのワークを行った。

講座の最後は、自分が力を入れていることや願い、根っこにある思い、越えたい壁などをストーリーテリングし、目標となる未来に向けて何をすべきかを考え（バックキャスト）、図5のようなテンプレートを使って可視化しアクションシートを作成するワークを行った。書き上げたアクションシートは机の上に呈示し、参加者全員がそれらを見て回って応援メッセージを付箋に書いて貼り合った（図6）。

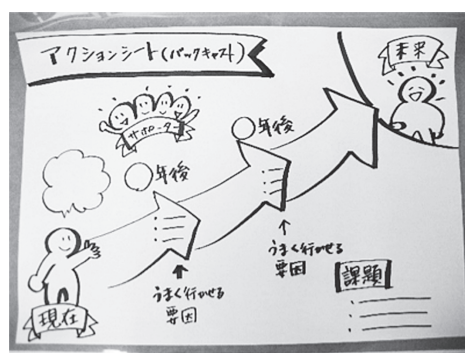


図5 テンプレート例（筆者書き写し）



図6 応援メッセージを貼り合う様子

4. システムに対する参加者の反応

一方、リカレント教育システムでの申し込みについて、参加者の反応はどうだったのだろうか。アンケートの設問「Web ページから申し込まれた方にお尋ねします。申し込みは簡単でしたか？」に対する回答は、そう思う 16 名、ややそう思う 2 名、どちらともいえない 3 名、あまりそう思わない 0 名、そう思わない 0 名、無回答 9 名であった。

前述のように、リカレント教育システムから申し込んだ参加者は 22 名であったので、本システムを利用した申込者の大半が難しさを感じなかったことがアンケート結果からわかる。参加者の多くは、30 代～50 代の社会人であったことから、高校生だけでなく、幅広い年齢層でも問題なく申し込みができたことが確認できたといえるだろう。ただし、システムを利用しなかった 11 名に対し、利用しなかった理由の調査は行えていない。今後は、その層に対しての調査も行い、もし障壁があるのなら、それを取り除く努力が必要であろう。

5. おわりに

これまで筆者は、グラフィック・ファシリテーションは対話の場面において効果が発揮されるものだと思っていた。しかし、今回の講座では、自分の脳内整理や未来を描くツールとしての活用にも言及されており、情報を可視化することの幅広い効果について考える機会となった。また、対話の場面においても、絵心以前に、話し相手としっかり向き合うことや、話の内容を正確に受け止めて理解することが大切であると知ることができた。

一方、リカレント教育システムの申込フォームは、本講座の参加者アンケートで、大きな問題がないことは確認できたが、申込フォームは整備を進めているリカレント教育システムの一機能にすぎない。今後、学びの情報を求めている多くの人々に情報を届けられるように、他の機能も整備・充実させていく必要があることはいうまでもない。それに際しては、今回の講座で学んだように、技術だけに頼ることなく、実際に利用者と向き合い、利用者に寄り添ったシステム作りを進めていくことが大切ではないかと考える。

謝 辞

今回、情報収集にご協力いただいた学長企画室の皆様と講師の玉有朋子氏に心より感謝いたします。

参考文献

玉有朋子（2019）グラフィック・ファシリテーション．鈴木康久，嘉村賢州，谷口知弘編 はじめてのファシリテーション―実践者が語る手法と事例．昭和堂，京都，pp.48-49